3年 第3回

国語

〔実施時間45分〕

注意

1 問題は 1 から 5 までで、7ページにわたって印刷してあります。
2 声を出して読んではいけません。
3 答えは、すべて解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
4 答えは、**特別の指示**のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ…のうちから、最も適当なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、解答欄にその記号を書きなさい。
5 答えをなおすときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。

塾内個人No.　　氏名

この問題は、テスト終了後、塾内個人No.と氏名を記入し、先生に渡してください。
成績表返却の際、『解答と解説』と併せてお渡しします。

進研Vもし

SAMPLE

1

次の(1)～(5)の――の漢字の読みを、**ひらがな**で書け。

(1) 会への参加を勧める。
(2) 著しい進歩を見せる。
(3) 傾斜の急な坂を上る。
(4) 目標点に到達する。
(5) あいさつを奨励する。

2

次の(1)～(5)の――のかたかなの部分を、**漢字**で書け。

(1) 減った分をオギナう。
(2) 良好な関係をキズく。
(3) 強くインショウに残る。
(4) 需要とキョウキュウの関係。
(5) ソウチを実験に使用する。

3

次の文章を読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

戦前、古本屋で買った、小さな[A]英語の文学用語辞典をまだ持っています。その辞典で「古典」、"classics"というのを引いてみたら、こうありました。「古典とは、文学の基準的かつ永久的価値ありとみなされる作品で、大抵の人が読んだつもりになっているが、実は読んでいない本。」

これは、(ア)この辞典が一種の冗談辞典なのでわざと(イ)こう書いてあるわけなのですが、この冗談辞典の定義は、案外[B]古典というものの本質を衝いているという気がします。

ロシアの劇作家チェホフが、(ウ)どこかでこういうことを言っていると友人から教わりました。「科学は問題を解決するが、文学は問題を提示する。」なるほどうまいことを言ったもんだと思いますが、私は(エ)これに〝古典〟という言葉を加えて、こういえると思います。「科学の古典は問題を解決するが、文学の古典は問題を提示するだけだ。」

まず科学についていえば、例えば十七世紀にニュートンが『プリンキピア（自然哲学の数学的原理）』という本を書いて、天体の運行を万有引力[注1]の法則で体系的に説明しているそうです。

これはつまり〝科学の古典〟なのであって、その本の中で問題は解決されているわけでしょう。そしてその解決されたこと、［ア］答[こたえ]がどういう意味を持つかをその後の時代の人たちが検討し、検証し、さらにそれを発展させて行く――というところに、〝科学の古典〟の本質はあるのだろうと思います。

一方、〝科学の古典〟が問題を解決するのに対して、〝文学の古典〟は問題を提示するのみなのです。[C]確かに作品の中で事件は一応解決されているが、答はそこには示されていない。

SAMPLE

例えば『ハムレット』(注2)。この作品の中でクローディアス王はハムレットに刺されて死に、[イ]ハムレットは復讐を遂げ、クローディアス王の妃でハムレットの母のガートルードも死に、ハムレットも死に、それで作中の事件は解決される。だが『ハムレット』という作品そのものが一体どのような問題を提示しているかを、作中の事件の解決は、[ウ]作品自体は何も答えてくれない。それは『ハムレット』を読んだ人、[エ]その上演を観た人が、自分でみつけ出さなければならないのです。というより、そういう問題をみつけ出すことによって初めて、『ハムレット』という作品が本当に〝おもしろかった〟ということになるわけでしょう。

つまり〝科学の古典〟と違って、〝文学の古典〟は、永遠に問いを発し続ける。けれども、ただ読んだつもりになっている人には、その問いは分からない。『平家物語』にしても、中学、高校で原文に触れただけ、あるいは原文の全部を読んだとしても、ただ読んだだけでは、『平家物語』がどういう問いを発しているか分からない。つまりその問いは、読者の側が発見すべきものなのです。

言いかえれば、古典は、発見されるに値する問いを内に持って存在している。だから、読者の側が問いを発見してそれに読者自らが答えようとする姿勢がなければ、古典はただ一冊の古い本に過ぎないということになる。つまり、古典の中に読者がどういう問いを発見するかということで、古典は生きて存在してくるのです。

昔から本は無数に書かれていますが、そういう問いを発する本、少なくとも問いを探そうとすることを読者に要求する本は、決して多くはありません。その決して多くはない本が、古典であるのです。

例えば松尾芭蕉を考えてみると、彼が僅か五七五の短い句を詠んでそれから三百年あまりが経過する中で、代々の人が彼の句を様々に解釈(D)して来たし、これからも解釈して行くでありましょう。その中で、新しい解釈が生まれたり古い解釈が見直されたりする。そういうふうに作品が発する問いを人々が発見し、その発見に答えようとし続けるからこそ、芭蕉の句は古典として残って来、古典としてあり続けるわけです。このようにして古典は[E]を、生命を持つことができる。それが、古典が現代に生きるということなのだと、私は考えます。

ところで、そうであるのなら、その古典と呼ばれる本から、読者はどうやって問いを発見するか。それはむろんのこと読者の側の責任で、彼は問いを発見する能力を持っていなければならんということになります。ではその能力とは何か。その基本は、いま自分が生きている現在、あるいは現代に対して、常に何か疑問を持っているということだと私は思います。疑問という言葉が強過ぎるとすれば、現代への強い関心と言いかえてもいいかも知れません。現代への関心が、古典のはらむ問いとつながってくるからこそ、古典は現代に生きる、つまりただの古い本ではなくなる(F)、古典になるというわけです。

(木下順二「〝劇的〟とは」による)

(注1) 万有引力＝質量を持つすべての物体の間で引き合う力。

(注2) 『ハムレット』＝イギリスの劇作家、シェークスピアの悲劇作品。

(1) 文章中の小さな(A)と同じ品詞のことばとして最も適当なものを、文章中の〜〜線ア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

(2) 文章中に B 古典というものの本質 とあるが、筆者は「古典」をどのようなものと考えているか。それを説明した次の文の［　　］に入る最も適当なことばを文章中から十一字で抜き出して書け。

> 古典とは、［　　］をその中に持っており、それを発し、それを探すことを読者に要求する本である。

(3) 文章中の［ア］・［イ］・［ウ］・［エ］のうち、他の三つと異なる接続語が入るものを選び、その記号を書け。

(4) 文章中の C 確 と同じ画数の漢字を次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 衛　イ 厳　ウ 総　エ 選

(5) 文章中に D 解釈して とあるが、ここでの「解釈する」の意味をまとめた次の文の［　　］に入る最も適当なことばを文章中から十二字で抜き出して書け。

> 読者が古典の中にみつけ出した問題に、［　　］こと。

(6) 文章中の［E］に入ることばとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 現実性　イ 永遠性
ウ 創造性　エ 情報性

(7) 文章中に F ただの古い本ではなくなる、古典になるというわけです とあるが、「古典になる」とはどういうことか。それを説明した次の文の［　　］に入る最も適当なことばを文章中から四字で抜き出して書け。

> 古い本の持つ問題と、読む者が生きている現在、あるいは、現代という時代に対して抱く疑問すなわち［　　］が関連してくることで、その本は古典としての価値を持つということ。

(8) この文章で述べられている内容として合っているものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア ニュートンが『プリンキピア』で提示した、天体の運行に関する問題は、その本の中では解決に至っていない。
イ 『ハムレット』の作中での事件は解決されているが、そのことは、作品が提示する問題の答にはならない。
ウ 『平家物語』を原文で読むことは、その作品が提示する問題をみつけるためには絶対に必要なことである。
エ 芭蕉の句は様々な解釈が可能であるが、そのことは、彼の句が優れていることの証明になっている。

SAMPLE

4 次の文章を読み、あとの(1)〜(7)の問いに答えよ。

「わたし」は、小学五年生の女の子である。保健室のヒデコ先生（ヒデおば）のもとを訪ねると、そこには、小学一年生のたっちゃんと、たっちゃんの両親がいた。たっちゃんは、難しい手術を受けるため、近々入院することになっていた。

ヒデおばはたっちゃんの両親ともう少し話をしてから、カーテンを開けた。横からお父さんが「たっちゃん、ヒデコ先生にお別れしなさい。」と言った。「いままでお世話になりましたって。」お母さんは黙って、ハンカチを目元にあてていた。たっちゃんはお別れの意味がよくわからないのか、きょとんとしてうなずき、「ヒデコせんせい、またね。」と手を振るだけだった。こっちのほうがつらくなって、たっちゃんの手術のことが心配にもなって、胸[A]が熱くなった。口の中でドロップスが溶ける。悲しみの［B］が溶けて、広がって、染(し)みていく。ヒデおばは、白衣のポケットに手を入れた。「たっちゃん、もうハッカのドロップス食べた？」「うん、おいしくないからのんじゃった。」「じゃあ、お別れだから、もう一個あげる。」緑の缶をポケットから取り出して、カラカラ、と音をたてて振った。「たっちゃんがいちばん欲しいドロップス、言いなさい。それが出たら、手術が成功して元気に遊べるよ。」うそー。だめ、それー。

「ぼく、ブドウがいいなあ。」

わたしはあわてて口の中のドロップスを呑(の)み込んで、ヒデおばに、だめです、やめてください、と言おうとした。でも、オレンジの甘みで口の中がべたべたして、呑み込んだドロップスも喉(のど)にひっかかったみたいで、声が出ない。「なにが出てくるかわかんないけど、ブドウだったら、うれしい？」「うん。」「先生もうれしいけどねえ、どうだろうねえ、うまくいくかどうかわかんないよ。」そんなのやめて。ゲームにしないで。[C]絶対に負けるゲーム、たっちゃんにやらせないで。

ヒデおばは蓋(ふた)を開けた缶をまた軽く振って、たっちゃんの手のひらに、ころん、とドロップスを落とした。紫色のドロップス——「やったーっ。」とたっちゃんは歓声をあげた。ブドウ。間違いない。あの色、あの形は、ブドウのドロップスだった。赤い缶のやつにしか入っていないブドウが、緑の缶から出てきた。お父さんとお母さんも手を取り合って大よろこびだった。やったな、やったね、すごいな、よかったね、と二人とも涙声でよろこんでいた。

たっちゃんは、あーん、と口を大きく開けて、ブドウのドロップスを舌の先にのせた。口を閉[D]じて、ぺろん、ぺろんとなめて、「おいしいっ。」と笑った。きっと、その味、うれし涙だ。そして——何週間か、何ヶ月か、何年先かわからないけど、[E]たっちゃんのお父さんとお母さんはもう一度、二人で手を取り合ってうれし涙を流すんだろうな、と思った。信じている。不思議な奇跡が起きたのだから、それ、信じていい、と思う。

たっちゃんが両親と一緒に帰ったあと、ヒデおばは「あんたも食べる？」とドロップスの缶を差し出した。「あの……。」やっぱり、不思議だった。「なんでブドウが出たんですか？」「なんでって、入ってたから出たんでしょ。」缶を受け取って、手のひらに出した。びっくりして、残りのドロップスも手のひらに出した。ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ……。ぼうぜんとしている隙(すき)に、ヒデおばは机のひきだしを開けて、[F]赤い缶のドロップスを取り出した。「たっちゃんがブドウが好きだっていうの、聞いてたから。」ヒデおばはそこから出して……こっちに入れたんだ。だから、オレンジとハッカのドロップスは最初から外に出ていたんだ。最後

にたっちゃんがドロップスをなめるときには、ぜんぶブドウになるように。うれし涙のドロップスをお別れにプレゼントできるように。

「ああ、もう、あんた、こんなにいっぺんに出しちゃうと、しけっちゃうじゃない。」しかられた。「食べるぶんだけ食べて、あとは中に戻しなさい。」とにらまれた。でも、[G]わたしと目が合いそうになると、そっぽを向いて、「ああ、もう面倒だった面倒だった。」と怒りのため息をつく。わたしはブドウを一個だけ口に入れ、ぺろん、ぺろんと舌ではじくようにドロップスをなめていると、ブドウの味や香りと一緒に、[H]自然と笑い声も出てきた。甘いなあ、ドロップス。おいしいな、すごくー。

（重松清（しげまつきよし）「ドロップスは神さまの涙」による）

(1) 文章中に [A]胸 とあるが、「胸」を使った表現とその意味の組み合わせとしてふさわしくないものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 胸を躍らせる ― 喜びや興奮でわくわくする
イ 胸をなでおろす ― 心配が解消されて安心する
ウ 胸を打つ ― 突然のできごとにひどく驚く
エ 胸を焦がす ― 思いがつのってせつなくなる

(2) 文章中の [B] に入ることばとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 空気　イ 声
ウ 思い出　エ 涙

(3) 文章中に [C]絶対に負けるゲーム とあるが、「絶対に負けるゲーム」だと「わたし」が思った理由を、「**ドロップス**」「**缶**」ということばを用いて、**二十五字以上、三十字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(4) 文章中の [D]閉じ、[F]赤い の活用形を次のア～カのうちから一つずつ選び、その記号を書け。

ア 未然形　イ 連用形　ウ 終止形
エ 連体形　オ 仮定形　カ 命令形

(5) 文章中に [E]たっちゃんのお父さんとお母さんはもう一度、二人で手を取り合ってうれし涙を流すんだろうな とあるが、そうなるのはどのようなときだと「わたし」は思っているか。それについて説明した次の文の [ ] に入る最も適当なことばを文章中から**十三字**で抜き出して書け。

たっちゃんが、[ ] ようになったとき。

SAMPLE

(6) 文章中の G わたしと目が合いそうになると、そっぽを向いて とあるが、その理由として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア ブドウのドロップスをたっちゃんにあげるためにした多大な苦労を、「わたし」に隠したかったから。

イ 自分の行動を思い出し、無邪気によろこんでくれたたっちゃんや両親に対して罪悪感を覚えたから。

ウ たっちゃんをよろこばせようと準備していたことを「わたし」に知られて、照れくさかったから。

エ たっちゃんにブドウのドロップスが偶然出た幸運を素直によろこぶ自分が恥ずかしかったから。

(7) 文章中に H 自然と笑い声も出てきた とあるが、このときの「わたし」の気持ちについての説明として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 厳しい現実をつきつけられて困惑しているたっちゃんを懸命になぐさめようとするヒデおばの努力に、深く感動している。

イ 口にしたブドウのドロップスにヒデおばの優しさを感じるとともに、たっちゃんの手術がうまくいくことを信じている。

ウ 念願のブドウのドロップスを食べることができて素直によろこぶとともに、その機会をくれたヒデおばの親切心に感謝している。

エ たっちゃんの境遇には同情しつつも、ブドウのドロップスを巧みにたっちゃんの手に渡したヒデおばの手法に感動している。

5

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

或る山寺に、(注1)遁世の上人ありけり。万の修行者の集まり、中に或る僧申しけるは、「法師は生まれてよりこの方、すべて腹立て候はず。」と言ふ。この上人(注2)学生なる故に、仏法の道理を以て是を信ぜず。「凡夫、(注3)貪嗔痴の A あり。(注4)聖者にてましまさば申すに及ばず。凡夫として、B すべて腹立たぬ人はなきことなり。たとひうすきこきこそあれ、いかでか三毒なからむ。」と言へば、「すべていささかも腹立せず。」と言ふを、C なほ信ぜずして、D 実ともおぼえず。(注5)御房の虚言と覚ゆる。」と言はれて、「たたぬと言はば、たたぬにてこそあらめ。かくのたまふべきか。」とて、顔をあかめてしかりけり。

（無住「沙石集」による）

（注1）遁世の上人＝俗世を離れて修行する立派な僧。
（注2）学生＝仏教を学んでいる者。
（注3）貪嗔痴＝欲と怒りと愚かさ。
（注4）聖者にてましまさば＝聖人でいらっしゃるなら。
（注5）御房の虚言＝あなたの作り話。
（注6）かくのたまふべきか＝このようにおっしゃってよいものか。

(1) 文章中の A に入る最も適当なことばを文章中から二字で抜き出して書け。

(2) 文章中の B すべて腹立たぬ人はなきことなり の現代語訳として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア すべての人が腹を立てるわけではない
イ 腹を立てる人は立てない人より少ない
ウ 腹を立てない人はいないものである
エ 腹を立てない人も必ずいるものである

(3) 文章中に C なほ信ぜずして とあるが、誰が「信じない」のか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 遁世の上人　イ 聖者
ウ 或る僧　エ 凡夫

(4) 文章中に D 実ともおぼえず とあるが、なぜか。その理由を説明した次の文の□に入る最も適当なことばを、文章中から五字で抜き出して書け。

相手のことばが、□に合わないから。

(5) この文章で述べられている内容として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 修行者たちは、示し合わせて或る僧を意図的にからかった。
イ 遁世の上人は、或る僧にうそをつかれたことで腹を立てた。
ウ 或る僧は、遁世の上人に言い間違いを指摘されて恥ずかしがった。
エ 或る僧は、最終的に、自らのことばと矛盾する行動をとった。

SAMPLE